

土 生き物としての土

清水 永一

土なんかなくてもトマトが作れると思っている人が多い。土を否定する考え方が一部にはありません。筑波で開かれた科学博では水耕栽培のトマトが何個なるかということが話題になりました。確かに、トマトにとって理想的な環境を人工的にでも作ってやれば万単位の実を付けます。現在の科学技術では簡単なことです。

この人工的な環境というのはどうなっているのでしょうか。土の代わりに水が使われます。水といってもただの水ではなく、化学肥料や農薬まがいのものを溶かしこんだ生暖かい（化学反応を高めたリトマトの成長を早めるため）液体です。太陽の代わりにあはの悪魔的な原子力発電所で作られた電力を大量に浪費する人工光ランプを使い石油も大量に消費する温室です。

このような環境で作られたトマトはもはや食べ物とはいえず工業製品そのものです。この工業製品「トマト」が一部市場にでまわっていて、これからどんどん増えそうです。

土は生きています。土の中には、いろいろな動物や昆虫、微生物、細菌類が生きているひとつの生命系であって宇宙です。夏、トマト畑の敷き藁をはくとクモ、ミミズ、てんとう虫、はざみ虫、ごみ虫、かげろうの仲間など名前も知らない生き物だらけです。たった1グラムの土の中に億単位の動

物や、昆虫微生物が住み、この多種多様な生き物が食べたり、食べられたりの食物連鎖の関係で土のなかに存在しています。豊かな土とはこれらの生き物の数が多くまた活発に活動しているということです。だから、農薬や、化学肥料の多用は、土のなかに生きているこれらの生き物を殺し、死んだ「土」にしてしまうのです。

トマトの害虫にアブラムシがいます。トマトの柔らかい芽、葉、実などの汁液を吸って枯らしたり、タバコモザイクウイルスとか、キュウリモザイクウイルスの菌をばらまき、葉、芽、実等をちぢれさせてしまいます。収穫量は激減します。この時期は殺虫剤を使うべきかどうか常に悩まされます。もし使えばトマトも枯れたり、実がおかしくなったりしないのは明らかで、ただでさえ敵しい農業経営が好転するでしょう。一度の殺虫剤の散布でもかなりの効果があるのは知っていますが、毎年のように使わずに被害を大きくしてしまうのです。

殺虫剤を使うことは、アブラムシの天敵であるクモ類、てんとうむし、くさかげろう等も殺します。これらの肉食昆虫は、野菜にとつての害虫を食べてくれるので、自然と被害の広がりを食い止めてくれます。だから、何年にもわたって畑の生態系のバランスの維持を目指して除草剤も使わずにきました。天敵も確実に増えてきています。

農薬を使うことはこれら天敵を殺し、土の中にも農薬を残すことにもなるのです。土の中に入れたものは、土の中に残るか、野菜が吸い上げるか、空気のなかに放出されるか、雨水と一緒に川に流れ込むかしかないので。

土を死に至らせる事は、水、空気、緑といった生活環境をも破壊する危険性があります。

あらゆる生き物を生かすような農業でなければ食べ物を育てる人間、食べる人間も生命力を維持する食べ物の恵みにあずかれないのでしょう。汚れ無き土に種を蒔け。無農薬を目指す野菜作りを十数年つづけてえた結論です。

(清水農園)

堅い土、柔らかい土

豊田 一秀

(1)

三月の中旬、あまにがい風が吹くようになると、外遊びの子ども達の肩から力がぬけてくるようだ。そして地面にゆったりと座って遊ぶ姿が多く見られるようになってくる。

丁度そのような頃、この遊びは発明された。靴のドロ落とし用マットの網目から、固まった土を一つ一つ、子ども達はぬき出している。一つの穴から指を入れ、隣りの穴の下から、指をそっと押し上げると、スポッとかたまりがもち上がってくる。そして、子ども達は大事そうに収穫物をコップや升に集めている。スポッとぬけるところや、同じ型のもものが集まってくるのがこたえられないといっ